The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プラトン『国家』におけるムーシケー論
Author(s)	里中, 俊介
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2010, 44, p. 29-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プラトン『国家』におけるムーシケー論

里　中　俊　介

1. 序論

プラトンは『国家』において、自らの目指す理想国家を実現するための教育のあり方を示している。それは、国家を統率し、守護すべき者を養育するための教育プログラムである。そして、その最終段階においては、事物の本質であるイデアを観照し、真の知者となることを目指すものである。プラトンはこの国家の守護者を育む教育システムに大きく分けて二つの段階を設定している。つまり、ムーシケーとギュムナスティケー（体育）によって行われる初等教育と算術、幾何、天文学、そしてディアレクティケー（哲学的問答法）によって行われる高等教育の二つの段階を設定しているのである[1)]。本稿において問題とするのは、プラトンの初等教育論である。そして、特にムーシケーの持つ教育的役割を考察対象とするものである。

ムーシケーとはmusicの語源であることからも分かるように、本来は音楽を意味する言葉である。しかし、プラトンが生きていた古代ギリシアにおいては、より広い内容を持っていたと考えられる。つまり、ムーシケーとはムーサの女神が統括する技芸全般を意味し、音楽のみならず、広く様々な詩作品などの文芸一般をも内包していたのである。そのため、『国家』の第2から第3巻にかけて、プラトンが初等教育論としてムーシケーを語る際にリュトモス（リズム）とハルモニアー（ハーモニー）といった音楽的要素のみではなく、ホメロスやヘシオドス等の詩作品全体をムーシ

ケーとして取りあげ、その内容について教育にふさわしいものであるかどうかを考察しているのも、当時のギリシア社会においてはむしろ当然のことなのである。

それゆえ、プラトンは『国家』のムーシケー論において詩を取りあげ、それが理想国家の教育の初期段階において有用であるかどうかを吟味している。周知のように、プラトンは『国家』第10巻においては詩人批判を行っている。それは詩人の国家からの追放にまで及ぶ痛烈なものである[2)]。こうした詩人への批判的態度は、プラトンにおいては、すでに初期の対話編から現れており、『国家』第2から3巻にかけてのムーシケー論においても、詩人の作品は無批判的にその教育的役割を期待されているのではなく、あくまでも注意深い批判的意識のもとで吟味、検証が為されているのである。そして、それは、ホメロスを中心とする詩人の詩句を具体的に取り挙げ、プラトンの定める規範に沿わないものを削除するという、詩の検閲なのである。

さて、本稿において、プラトンの理想国家における教育論の文脈の中で、ムーシケーがどのような役割を担うのかという問題を考察することはすでに述べた。それはより正確には、ムーシケーの中でもとりわけ詩という文芸の持つ役割をその考察の中心に据えるということになる。つまり、『国家』の第2巻から3巻において展開される詩の検閲が、プラトンのどのような意図のもとで為されているのかを明確にすることで、批判的意識の裏側にある、詩に期待されている教育的機能を明らかにするということなのである。その際、プラトンが提示している、詩人が神々を描く際の規範を重視する。というのは、プラトンの掲げる神々の規範とそこから読み取ることのできる神観の独自性は、詩の検閲の意図と密接に結びついていると考えられ、この神々の規範が詩の検閲の意図を読み解く際に有効な手掛かりを提供していると考えられるからである。

それでは、実際に、詩に対して検閲を行っているプラトンの真意を明らかにするための考察に移りたい。

2. 神々についての規範

まずは、『国家』第2巻から3巻における、検閲の具体的内容を確認することから始めたい。プラトンは理想国家を将来的に守護することになる者の教育が、ミュートス（神話的な物語）によって為されるべきだと主張している[3)]。このことは、当時のギリシア社会においては一般的な事であり、プラトン自身、ミュートスを教育プログラムに採用することにほとんどためらいを見せてはいない。つまり、ギリシア市民は幼いころに聞かせられる神々や英雄に関する宗教的色彩を帯びた多くの物語を通じて、善き人間の行動様式やその性格を模倣し身につけて行くのが通例であったということである。そして、そのような神話を生み出し、当時のギリシアの教育において絶対的権威であったのがホメロスであるということは、広く知られた事実である[4)]。そのため、自然な流れとして、新たな教育の枠組みを提示しようとするプラトンの試みは、詩人が詩作を為す際に守るべき規範を自ら提示することで、ホメロスを中心とした旧来の詩人の詩句に対する見直し作業としての、検閲によって果たされることになるわけである。

そこで、プラトンは第一に、詩作における最も基本的な原則を次のように示して見せる。

「Τοιοίδε πού τινες, ἦν δ᾽ ἐγώ· οἷος τυγχάνει ὁ θεὸς ὤν, ἀεὶ δήπου ἀποδοτέον, ἐάντέ τις αὐτὸν ἐν ἔπεσιν ποιῇ ἐάντε ἐν μέλεσιν ἐάντε ἐν τραγῳδίᾳ.」（379A）

「（私は言った。）おそらく、それは何か次のようなものである。つまりそれは、神がまさにそうであるような性格が、常に与えられるべき

であるということ。誰かが神を叙事詩において描くにせよ、抒情詩において、あるいは悲劇においてにせよ。」

このように、叙事詩や悲劇といった詩のジャンルを問わず、プラトンは詩人に対して、自らの描く対象の本来の姿を描くこと、つまり、対象の本質に即した描写を行うように要請している。この詩作における基本的な原則の提示に続いて、プラトンは神話における主要モチーフである神々が、詩においてどのように描かれるべきかを示すことへと話題を移している。そこで提示されるのは神々の持つ本来的性質であり、それに即して詩人が神々を表現すべきところのものである。ここでも、またプラトン本人の言葉を引きたい。

「Οὐκοῦν ἀγαθὸς ὅ γε θεὸς τῷ ὄντι τε καὶ λεκτέον οὕτω;」(379B)

「それでは、まさに神とは真に善きものであり、そのように語られるべきではないか。」

このように、プラトンは「神は善なり」ということを詩作の際の規範として定めているが、それは、神々がその本来的に備えた善性のゆえに、善きこと以外のいかなることの原因ともなり得ないという意味合いを、同時に含むことになるのである。それを表しているのが次のような言説である。

「Οὗτος μὲν τοίνυν, ἦν δ᾽ ἐγώ, εἷς ἂν εἴη τῶν περὶ θεοὺς νόμων τε καὶ τύπων, ἐν ᾧ δεήσει τούς τε λέγοντας λέγειν καὶ τοὺς ποιοῦντας ποιεῖν, μὴ πάντων αἴτιον τὸν θεὸν ἀλλὰ τῶν ἀγαθῶν.」(380C)

「（私は言った）それでは、そのことが神々に関する法と規範の内の一つということになるだろう。それに基づいて、話を語る者たちが語り、詩人たちが詩作することになるであろう。つまり、（そのこととは）神はあらゆることの原因ではなく、善きことの原因であるということである。」

これらの言説が示すように、プラトンが神々を描く際の規範とするのは、「神は善であり、善のみの原因である」ということである。この規範に従って、プラトンは具体的には、次のようなホメロスの詩句を引用し、国家の教育において採用すべきではないと述べている。

「ὡς δοιοί τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει κηρῶν ἔμπλειοι, ὁ μὲν ἐσθλῶν, αὐτὰρ ὃ ειλῶν·
καὶ ᾧ μὲν ἂν μείξας ὁ Ζεὺς δῷ ἀμφοτέρων,
ἄλλοτε μέν τε κακῷ ὅ γε κύρεται, ἄλλοτε δ᾽ ἐσθλῷ·
ᾧ δ᾽ ἂν μή, ἀλλ᾽ ἄκρατα τὰ ἕτερα,
τὸν δὲ κακὴ βούβρωστις ἐπὶ χθόνα δῖαν ἐλαύνει·」（379D）[5)]

「ゼウスの宮の床に二つのつぼが置かれている。
一方には善き運命が、もう一方には悪しき運命が満ちている。

そして、ゼウスが両方の運命を混ぜ合わせて与える者の方は、
時に悪い目に会い、ときには良い目を見る。

しかし、ゼウスが混ぜ合わせずに片方を与える者の方は

苦しい飢えが駆り立て、大地をさまよう」

このホメロスの詩句だけでなく、プラトンはアイスキュロスもまた引用している。

「θεὸς μὲν αἰτίαν φύει βροτοῖς, ὅταν κακῶσαι δῶμα παμπήδην θέλῃ.」[6)]（380A）

「神は人間たちの内に罪を植え付ける。家を完全に滅ぼそうと欲するような場合には」

これらの詩句が検閲対象として取り上げられ、抹消を言い渡されるのは、表されている神々の姿が、プラトン自身が神々に関する規範として定めた神の善性に反するようなものだからである。こうした内容は、本来的に善である神が諸悪の原因となるという、プラトンにとってみれば矛盾した事態を語っており、首尾一貫性を欠き、さらには神々への冒瀆でもある。こうした詩句は、文芸のジャンルを問わず[7)]、プラトンによっては受け入れられることのないものなのである。

さて、この第一番目の規範に続き、プラトンはもう一つの規範を導入している。その内容は次のようなものである。

「Οὕτως, ἔφη, ἔμοιγε καὶ αὐτῷ φαίνεται σοῦ λέγοντος. Συγχωρεῖς ἄρα, ἔφην, τοῦτον δεύτερον τύπον εἶναι ἐν ᾧ δεῖ περὶ θεῶν καὶ λέγειν καὶ ποιεῖν, ὡς μήτε αὐτοὺς γόητας ὄντας τῷ μεταβάλλειν ἑαυτοὺς μήτε ἡμᾶς ψεύδεσι παράγειν ἐν λόγῳ ἢ ἐν ἔργῳ;」（383A）

「（私は言った。）では君はこのことが、それに基づいて語り、詩作しなければならない二つ目の規範であることに賛同するのだね。（つまりこのこととは）神々は自身を変容させる魔法使いではないし、言葉や行為における偽りによって我々を惑わすこともないということであるが。」

こうした言葉が示すのは、端的には神々は虚偽とは無縁の真なる者だということである。そして、この虚偽を用いて、人間を欺くということが、神々の変身と関係付けられている。つまり、自ら姿を変えることも、他の何物かによって変えられることも、その本来の姿を偽った状態であるとプラトンによって見なされるし、また、誰であれ、自ら好んでより劣った状態に変わろうとする者はいないということが前提されているのである[8)]。このことから、プラトンは次のように神の単一性について述べることになる。

「Ἀδύνατον ἄρα, ἔφην, καὶ θεῷ ἐθέλειν αὑτὸν ἀλλοιοῦν, ἀλλ᾽ ὡς ἔοικε, κάλλιστος καὶ ἄριστος ὢν εἰς τὸ δυνατὸν ἕκαστος αὐτῶν μένει ἀεὶ ἁπλῶς ἐν τῇ αὑτοῦ μορφῇ.」（381C）

「（私は言った。）では、神において自身を変化させようと望むということはあり得ないことであり、そうではなく、最も美しく最も優れているのであるから、神々の内のいずれも出来る限り常に単一のあり方で自身の姿の内にとどまることになると思われるのである。」

「Κομιδῇ ἄρα ὁ θεὸς ἁπλοῦν καὶ ἀληθὲς ἔν τε ἔργῳ καὶ λόγῳ, καὶ οὔτε αὐτὸς μεθίσταται οὔτε ἄλλους ἐξαπατᾷ,」（382E）

「したがって、神は全くもって行為においても言葉においても、単一なものでありまた真なるものであり、自らが変身することもなく、他者を欺くこともないのである。」

これらの言葉が強調するのは、神がその姿を変えることがなく、本来の姿を常に保持し続けるということ、つまり、神の単一性についてであり、この単一性が結果的に他者を欺かないということにもつながるということである。ここで、二つ目の神々についての規範を整理すると、「神は真であり、単一なるものである」ということになる。この規範に逸脱した次のような詩句は当然ながら許容されることはないのである。

「θεοὶ ξείνοισιν ἐοικότες ἀλλοδαποῖσι, παντοῖοι τελέθοντες, ἐπιστρωφῶσι πόληας」(381D)

「神々は異国人に似た姿となり、あらゆる様となって、国々を訪れる。」

3. 詩の検閲における道徳教育への問題意識

さて、ここまでは、『国家』第2巻で示されている神々に関する2つの規範と実際に規制対象となる描写について見てきたのであるが、問題はこのような厳しい検閲が行われるのは、プラトンのどのような意図に基づいているのかということである。この点に関しては、従来から多くの論者によって、プラトンは教育上の道徳的な問題に多分に関心を置いているということが述べられてきている[9)]。つまり、ホメロスを中心とした詩句に対して検閲が行われるのは、そうした詩句が理想国家の守護者となるべき者の初等教育にはふさわしくない道徳上の問題点を抱えているためであると

いうことである。

『国家』第2から3巻で初等教育論として展開されるムーシケー論において、その対象として想定されているのは、まだ十分に成熟していない若者たちである。そのため、そうした若者たちはいまだ経験も浅く、知的にも十分に訓練を施されていない段階にあるために、物事の善悪に対して主体的な判断を下すことができない状態にある[10)]。そのような者たちにとって、ホメロスなどの詩人によって語られる神話に登場する神々は、それに倣うことで、社会における道徳的規範を身につけていくための重要な模範となるべきものである。若者は宗教的感情と結びついた偉大な対象への憧れの念によって、その対象を模倣し、自らの性格を形成していくこととなるのである。このような人格形成における初期段階は、プラトンによって非常に重要視されている。それは、人間の魂というものは若い時に最も造形されやすいものであり、また若いころ身に付けた性格というものは、成人してからでは容易に変えることのできないものであるからである[11)]。そのため、初等教育に神々の物語を用いようとするプラトンにとっては、そうした神々が非道徳なものとして描かれることは、将来国家の守護者となるべき者にまで、その非道徳的性格を植えつけてしまうことになり、ゆえにそれは許されるべきことではないのである。そして、実際プラトンによって引用や言及が為されている詩句の多くは、神々同士の諍いや、親子間での復讐劇[12)]、また人間を欺くといったような、道徳上、倫理上問題のある神の姿が描かれたものなのである。

このような問題意識それ自体は、現代の我々にとってもおそらくそれほど奇妙なものとは見なされないだろう。現在も幼い子供に対して、そのような非道徳的な描写を含んだ一部の作品が規制の対象とされる場合があるのは事実であり、プラトンが同様の関心を持って、詩句の検閲を行ったと見なすことは自然なことであると考えられる。つまり、そのような道徳的

な関心があったこと自体は事実であるように思われるのである。しかしながら、こうした道徳的な問題意識だけをもってして、プラトンが詩の検閲を行った意図の全容とすることには疑問の余地が残る。というのは、事実としてプラトンは詩の検閲によって、ホメロス等の詩句の非道徳的要素を排除しているのであるが、プラトンが詩人に要求した詩を作る際の基本的な原則は、非道徳的な叙述を行うことを禁止するということではなかった。つまり、それは描く対象の本質に即した表現を追求すべきというものであったはずである。その原則から、プラトンが神々の本質を「善なるもの」として定めたために、ホメロスたちの描いている、多くの場合に道徳的に善ならざる神々の描写が、検閲によって削除されるべき対象とされたのである。

このように考えると、プラトンが詩の検閲を行った本来の関心が単に道徳的問題にあるとは言い難い。また、詩の検閲の意図を考察する際に注目すべきもう一つの点は、詩が組み込まれる初等教育は、それに続く高等教育、つまり最終的には真理であるイデアの観照を目指す哲学と共にひとつの教育プログラムの中に置かれているということである。確かにムーシケーによる初等教育は、『国家』第7巻で示される高等教育とは区別されるものであるが、それを抜きにしては国家教育が成立しなくなるといった内容のものであることも事実なのである。Jaegerはこの点に留意し、プラトンの言説の背後には哲学と詩との間にある重大な原理に関する相違が存在し、それが教育に関する彼の言説を支配していることを指摘している[13)]。

この相違とは、対象の本質を把握することを目指す哲学と、必ずしも対象の本質を把握することを必要としない詩人との相違であり、プラトンはそのような認識のもとに神々の本性を提示し、詩人たちに詩作の際の規範とすることを要求したのである。これは単に道徳的教育のみを、ムーシ

ケーとしての詩に期待する者の態度ではないように思われる。つまり、プラトンは理想国家を守護する哲学者を育むための教育における詩の役割を、道徳的な事柄に関する教育的機能だけに限定してはいないのではないか。むしろ、プラトンの問題意識はより大きな教育システムとのかかわり、つまりは哲学と関連した詩の教育的機能へと向けられているということができると思われるのである。そこで、次章においては、詩がプラトンの理想国家の教育に貢献する上で、哲学といかなる関連を持っているのかということを明らかにしたい。それが明らかになることで、プラトンの詩の検閲の真意も明らかになるものと期待されるからである。

4. 新たな神観

さて、『国家』第2巻で実施されている詩の検閲が道徳的関心の下でのみ為されているのではないとすれば、一つの疑問が浮かび上がってくる。それは、プラトンがなぜ、神々に関する規範を「神は善であり、善のみの原因であり、真なるものであり、単一性を保持するものである」と定めたのかということである。神々に対して単に道徳的に品行方正なるものとして、若者の模範となるべきこと期待するだけなら、詩人が神の道徳的善性を謳えば済むことである。しかし、プラトンは、それにもかかわらず、虚偽との無縁さということを持ちだしながら、神が永遠にその姿において変わることも変えられることもないという単一性についての言説を展開している。この単一性の強調は神が人を欺くことがないことを述べると同時に、神の存在のあり方が他の何者よりも優れていることを述べてもいるのである。

プラトンはなぜこのような善なる絶対的な存在者としての神を想定することを必要としたのか。それ以前に、このような神に関する観念は当時のギリシア社会において何のためらいもなく受け入れられるような一般的な

通念として定着していたものだったのだろうか。

この疑問に対して、Adamは『国家』第2巻で示された「神は善なり」という観念は、プラトンに帰すべきものであることを示唆している。Adamによれば、少なくとも道徳的に不品行を為す神への批判についてはクセノファネス等を先例として見出すことができるのであるが、善のみの原因なる神という明確な観念は、プラトン独自のものである可能性が高いというのである[14)]。

そして、このAdamによって提示された見解を近年になって裏付けたのがBordtである。Bordtもまた、プラトン以前には「神は善なり」という観念を見出すことができないということを論証している[15)]。Bordtは自身の論を展開する際にSolmsenのプラトンの神観に関する説を批判の対象としている。この批判対象とされたSolmsenが為す主張は、プラトンの神観、つまり「神は善なるものである」という見方は、あくまでギリシア社会の中で伝統的に踏襲されてきたのだというものである。「神が善である」という考え方それ自体は当時のギリシア人にとって何ら疑問の対象となるものではなく、「神は善なり」という神観はプラトン以前のギリシアを代表する詩人や哲学者の言論の中にも見て取ることができるというのがSolmsenの見解なのである。

しかし、これに対してBordtはプラトン以前のホメロスを始めとする詩人や哲学者によって描写された神についての表現を精査し、Solmsenがプラトンの神観とプラトン以前の神観との間に存在する微妙な差異を見落としているとして批判しているのである。

Bordtによれば、Solmsenによって「神は善である」という神観の存在した証拠として取り上げられている表現は、不十分なものである。例えば、ホメロスの『オデュッセイア』の第1巻の冒頭において、「人間が神々に対して、諸悪の原因としてとがめだてを行っている」と訴えられる場面が

ある[16]。Solmsenはこの個所で述べられている、神を悪しき事の原因と見なすことの不当性についての主張をもって、「神は善なり」という神観であると見なすのである。しかし、それに対してBordtはこの『オデュッセイア』の記述をプラトンが提示する「神は善なり」という神観と完全に同一視できるものではないと考えている。なぜなら、悪の原因でないことと善の原因であることは同一であるとは言えないからである。つまり、神を悪の原因と見なさないということは、神に否定的な見解を持たないということではあるが、積極的に善の原因と見なす態度とは異なるということなのである。

さらにBordtはヘシオドスやソロン、そしてアイスキュロスらの著作における神の描写に注目し、この三者が共に神を「正しいもの」と見なす点で共通していることを述べている。また、クセノファネスもまた神の「正しさ」への信念をもって、ホメロスやヘシオドスの描く悪事を行う擬人的な神を批判したことにも言及している。ただし、Bordtはこうした「正しき神」という神観をプラトンの「善なる神」と同一視することを承認しない。なぜなら、プラトンにとって、正しき行いも善によって基礎づけられなければ、真に価値あるものとはならないのであって[17]、「正しき神」と「善なる神」を全く同一の属性の神と判定するわけにはいかないからである。

また、Bordtはソフォクレスとエウリピデスの神観にも言及している。ソフォクレスの作品における神託や予言の背後に存在し、人間にとって動かすことのできない運命の支配者としての神は、超越的存在として世界を秩序づけるという点でプラトンの神観と結びつく部分を持つとBordtは述べる。ただし、明瞭な「善のみの原因」という神は見出すことができないことも同時に言われるのである。また、明確に「善なる神」を見出せないという点ではエウリピデスも同様であるとしているのである。

このように、Bordtは「神を否定的に見なさないこと」と「神を正しい

ものと見なすこと」と、そして「神を善であると見なすこと」とを区別し、プラトン以前には「神は善なり」という神観が現れていなかったのだと述べている。つまり、BordtはSolmsenがこのような厳密な区別を行わなかったことを批判し、「善なる神」がプラトンによって独自に導入された新たな神観であると主張しているのである。

このように、『国家』で明らかにされている神々に関する観念は、決して当時のギリシア社会一般の通念ではなく、プラトン独自のものである可能性を大いに秘めているということになる。つまり、「善なる神」とはプラトンにとっての神ということになるのである。

それでは果たして、何故プラトンは『国家』において新たな神観を自ら提案しているのか、つまり、プラトンにとって「善なる神」とはいかなる意味を持っているのかということが次なる問題である。この問題に関しては、Murrayによる主張を手掛かりとしたい。

Murrayは『国家』第2巻において、プラトンはもはや伝統的神観を示しているのではなく、新たな神観を提示することによって新たに哲学的思想を導入していると述べている。Murrayは第2巻で神々の姿形を表す語として使用されているἰδέαやεἶδοςといった語に注目し、これらが、後の第5巻や第7巻でのイデアに関する哲学的言説を予告しているとの考えを示しているのである[18)]。ただし、このような見解に対して、厳密に言えば『国家』においてイデア論が表舞台に登場するのは第5巻以降であり、第2巻ではἰδέαやεἶδοςと言った語は日常的な「姿かたち」という意味合いしか持っていないという意見もある[19)]。しかしながら、イデア論は『国家』以前の著作とされる『パイドン』や『饗宴』においてすでに現れており、『国家』執筆時にはプラトンがイデア論の構想を持っていたことは疑う必要がないと考えられる。つまり、Murrayの主張において重要なのは、新たな神観の導入の背後にはイデア論の存在があるという指摘なのである。

この考え方に依拠するならば、ἰδέαやεἶδοςといった語は、イデア論的観念を先取りしており、「善なる神」とはまさにイデア論における「善のイデア」に対応するものであると考えられる。つまり、『国家』における神々についての規範が示す「善なる神」としての神の存在は、その善性、善の原因であること、並びに真実性や単一性等の点において、「善のイデア」との間に類似性を持ち、「善のイデア」を象徴していると言うことができるように思われるのである。

しかし、このような考え方に対して、Adamはプラトンの形而上学と神学との間に明確な結びつきが証明されない間は、神をイデアと見なすことに慎重な構えを崩すべきではないと考えている[20)]。また、神とイデアの同一視に真っ向から反対するものとして、「プラトンは魂だけしか神と見なすことはなかった」という主張がある。このようなプラトンの神観に関する見解はde Vogelによれば、Burnet以来のものであるが[21)]、これを弁護したのが先にも言及したSolmsenである。Solmsenは、プラトンは諸々のイデアを神と呼んだことは無かったという見地に立ち、プラトンの神学はイデア論に言及することなく構成されねばならないという主張を為したのである[22)]。もし、その主張を受け入れるならば、『国家』においても、神とイデアを関連付けることはできないということになる。

しかしながら、このようなSolmsenの主張は「奇妙な解釈」としてde Vogelによって批判されている。de Vogelが批判の根拠として掲げるのは以下の3つの点である。一つには「イデア界はプラトンによってしばしば神的なるものとして言及されていること」。二つ目は「θεός（神）という語が『テアイテトス』においては明確にイデア界を指している個所が存在すること」。そして、3つ目の根拠としては「『ティマイオス』から『法律』まで魂はイデアの世界と同族のものと考えられているが、イデアの世界と同一視されたり、その上位に位置づけられたりすることはなかったという

こと」である[23)]。これらの根拠がSolmsenの解釈が「奇妙な」ものであることを明らかにしているのである。

さて、このように神とイデアを関連付けるべきではないという考えは批判され、むしろ我々は、プラトンが神をイデアと見なしていた可能性の根拠をde Vogelの批判的考察から見出せるように思われるのである。

しかしながら、たとえ用語や表現の類似性、あるいは他の著作における神とイデアの関連性を指摘できたとしても、最終的には『国家』という作品において、神とイデアとを関連付ける必然的意味合いを示す必要があると思われる。つまり、考察すべきことは、国家の初等教育と関連付けられ展開されているムーシケー論の文脈において、神とイデアとが結びつけられることがどのような意味を持つかということである。

そこで、続いては、果たしてプラトンがイデア論に基づいた神観に従ってつくられた詩に対して、どのような教育的機能を期待していたかを見ていきたい。ただ、その際に注意すべきは『国家』第2，3巻のムーシケー論と第10巻の詩人追放論との関係性である。というのも、『国家』第10巻における詩人批判はより明確にイデア論に沿って展開されているからである。

プラトンによる『国家』第10巻の詩人追放論は大きく内容的に大きく二つに分けられる。一つは詩の本質をミーメーシス（模倣）と捉え、真実から3番目に離れたものであると定義するミーメーシス論である。そして、もう一つは詩の受容が聴衆に与える心理的効果を取り扱う感情効果論である。

まずミーメーシス論においては、詩人は画家と同様に、感覚によっては捉えられないイデアを直接的模倣対象とするものではなく、あくまで感覚的事物を描写するということが述べられる[24)]。そして、このことから、詩人の作品は存在論的にイデアからは3番目とされ、詩がイデアの把握によ

る知識の獲得に貢献することがないということが帰結されるのである。つまり、プラトンによれば、詩は厳密な知識を授けるという意味での教育的機能を持っていないということになる。

しかしながら、詩の受容が直接的にイデアの認識をもたらすことは無いという考えは必ずしも詩を初等教育に割り当てたムーシケー論と矛盾しているわけではないと思われる。というのも、詩が知識を与える機能を持たないということは第10巻以前にもプラトン自身によってそれを否定する発言が為されているし[25)]、また、そもそも初等教育とは、理性の発達がまだ不十分な段階の若者のための課程であって、理性を目覚めさせ、イデアそれ自体の認識を目指す高等教育とは役割が異なると考えられるからである。

では、知識を授けるわけではないムーシケーの教育における役割とはいかなるものであるのか。このようなムーシケーの持つ役割は、プラトンの次のような言葉に集約されていると思われる。

「καὶ ὅτι αὖ τῶν παραλειπομένων καὶ μὴ καλῶς δημιουργηθέντων ἢ μὴ καλῶς φύντων ὀξύτατ᾽ ἂν αἰσθάνοιτο ὁ ἐκεῖ τραφεὶς ὡς ἔδει, καὶ ὀρθῶς δὴ δυσχεραίνων τὰ μὲν καλὰ ἐπαινοῖ καὶ χαίρων καὶ καταδεχόμενος εἰς τὴν ψυχὴν τρέφοιτ᾽ ἂν ἀπ᾽ αὐτῶν καὶ γίγνοιτο καλός τε κἀγαθός, τὰ δ᾽ αἰσχρὰ ψέγοι τ᾽ ἂν ὀρθῶς καὶ μισοῖ ἔτι νέος ὤν, πρὶν λόγον δυνατὸς εἶναι λαβεῖν, ἐλθόντος δὲ τοῦ λόγου ἀσπάζοιτ᾽ ἂν αὐτὸν γνωρίζων δι᾽ οἰκειότητα μάλιστα ὁ οὕτω τραφείς;」（401E − 402A）

「そしてまた、しかるべき仕方でそこで育まれたものは、欠陥のあるものや美しく作られていないものや美しく生じていないものを最も鋭敏に感じ取り、そして、正当にそれを嫌悪し、美しいものを讃え、歓び、

それらを魂の内に迎えて、それらによって育まれて自ら美しく、立派になるだろうし、他方で醜いものは正当に非難し、嫌うだろう。まだ若く理を把握できないけれど。しかし、このように育まれたものはとりわけ、理がやってきたときには、近しい間柄のゆえに認識して、歓迎するだろう。」

上記の引用部分におけるαἰσθάνομαι（感じ取る）という動詞の使用や、「まだ若く理を把握できない」といった表現からも分かるように、プラトンはムーシケー教育において、イデアの把握による知識の獲得を目指しているわけでない。ここで述べられているのは、ムーシケーが国家教育において有用となるのは、ムーシケーの受容によって若者が愛すべき対象を愛し、憎むべき対象を憎むように促される感情教育の局面であるということである。つまり、人間にとって原初的な好悪の感情は、対象への理性的な理解や判断が生じる以前においては、感覚的な快にいざなわれて、本来憎むべき悪しき対象さえも愛してしまうといった事態に陥りがちである。おそらく『国家』第2巻においてプラトンが批判した、悪しきことの原因である神々さえも神として見なしている当時のギリシア社会の状況がそうであったのである。また、『国家』第10巻における詩の感情効果論において、詩が魂の非理性的部分に作用し、嘆きや笑いに耽溺させるとして非難されるのも[26]、プラトンの定める規範から逸脱した詩がもたらす感情効果への批判であると考えられるのである。

プラトンはそうした状況を打開するために、ムーシケーである詩に対して、本来的に愛し、敬うべき対象である神の本性を「善なるもの」として、正しい仕方で描かせるために詩の検閲を試みたのである。そして、それによって、神は善なるものとして、本来愛されるべき善という本性を備えた真に愛されるべき対象となる。若者はこのような真に愛すべき対象を

愛し、その善性を模範として、自らの人格を形成していくことができるのである。プラトンはこのような、ムーシケーによる正しい情操教育と人格形成とが初等教育の段階で行われることを意図していたと考えられるのである[27)]。

そして、同時に、プラトンは人間だれもが神を愛し、神のようになろうとする宗教的土台とそれに基づいた教育システムの上に、自らの哲学、つまり、イデア論を重ね合わせた。そして、それによって、神、つまりは善のイデアを象徴するものを、理性による認識に先んじて愛することが実現するように、神々の規範を定めたのだと考えられるのである。プラトンが『国家』第10巻において、「神々への頌歌と優れた人々への讃歌」を国家に例外的に留めると述べるのも[28)]、ムーシケー論におけるそのような規範に即した詩を想定していると考えられるのである。

しかしながら、詩人がプラトンの定めた規範に従い、イデアに類似したものとして神を描くとしても、その神はあくまで具体的、感覚的イメージに固着された、ある特定の姿を持った神である。そのような神の存在は善のイデアの完全性に比べれば不完全なものでしかないということになる。また、プラトンは、すでに述べたように、ムーシケー教育において詩に何らかの知識を授ける役割を期待せず、むしろそれを否定している。結果的にそれらの事実は哲学的真理に対する詩の限界を意味しているのである。ここには詩と哲学とを混同することへのプラトンの問題意識が強く現れていると言えるだろう。しかし、だからと言って、プラトンが国家教育における詩の位置づけを軽視していたということにはならない。なぜなら、詩はその具体的な感覚的イメージの力により、まだ理性の備わっていない未熟な魂には大きな影響力を持っているからである。プラトンはこのような詩の力を媒介として利用し、事物の本質であるイデアへの愛を育むために、詩というムーシケーを国家教育に取り入れたと考えられるのである。

このような初等教育の段階における善のイデアへの愛こそ、国家の守護者たるべき者の魂に発現されるべき真の愛（エロース）であり[29]、詩がこの愛を育むムーシケーとなるために、プラトンは神々を描く際の規範を定め、詩の検閲を施行したのである。

5. 結論

ここまで述べてきたように、『国家』におけるプラトンの詩に対する検閲は、プラトン以前にも例が見られる道徳的な意味での神の堕落を批判するだけのものではない。そうした道徳的問題にも関心を払いながら、プラトンが「善なる神」という独自の神観を提示し、それを詩人に対して新たなる規範とすることを要求し、詩による教育を改革しようとするのは、国家の守護者である哲学者の教育においての詩の有用性を認めるからである。つまり、詩は理性的認識とは異なる仕方で魂を養育することが可能なため、プラトンは詩の中で描かれる神に善のイデアを象徴させることによって、初等教育の段階において事物の本質への愛を魂に植え付けようとしているのである。そのような初期の段階において、すべての存在を価値づける善のイデアへの愛が育まれることによってこそ、高等教育における、理性によるイデアの認識が支えられるのである。プラトンによる新たな神観の提示とそれに基づいた検閲は、哲学を支えるムーシケーとしての詩に課されたものだったのである。

注

本稿における引用テクストはOxford Classical Texts Platonis Opera（ed. J.Burnet.1922）に従う。

また、特に断りのない場合において、日本語への翻訳は本稿執筆者によるものである。

1）高等教育については『国家』第7巻（521C－531C）において詳細が語られる。
また、プラトンはディアレクティケー（哲学的問答法）を「本曲」とし、それ以外の諸学科（算術、幾何、天文学、音楽理論）を「前奏曲」（531D）と位置付け、区別している。

2）プラトンは『国家』第10巻冒頭で次のように詩の国家からの追放を宣言している。
「Τὸ μηδαμῇ παραδέχεσθαι αὐτῆς ὅση μιμητική·」
「詩の内で模倣（ミーメーシス）である限りのものは、決して受け入れない。」（595A）

3）Plato, *Rep*.2.377a

4）E.A.ハヴロックは『プラトン序説』（村岡晋一訳　新書館　1997　p70－104）において、ホメロスの叙事詩が当時のギリシア社会においては、エンサイクロペディアであり、教育的機能をもっていたと主張している。

5）Hom, *Il*.24.527-532.

6）Aessch, Fr.160(Nauck)

7）『国家』第2巻で検閲対象となっている詩句はそのほとんどがホメロスからの引用句であるが、プラトンは検閲の対象を叙事詩にのみ限っているわけではなく、抒情詩や、悲劇も対象となると述べている。（379 A）

8）Plato, *Rep*.2.381c

9）一例をあげれば、M.H.Parteeは*Plato's Poetics*, University of Utah Press. Salt Lake City. 1981.p57.において次のように述べている。
「The context of Plato's comments on poetry in *Republic II* points out his immediate moral concern.」

10）Plato, *Rep*.2.378a,378d.

11）Plato, *Rep*.2.377b,378e.

12）具体的にはヘシオドス『神統記』154－181行におけるクロノスによる、父ウラノスの王位を奪う行いや、同453－530行におけるゼウスによる父クロノスへの復讐劇がプラトンによって言及されている。（378A）

13）W.Jaeger, *Paideia*, tr.G.Highet, Oxford University Press.1986.p212-213.

14）J.Adam, *The Republic of Plato*.Cambridge University Press.1969.におけるPlato, *Rep*, 379aに関する註を参照。

15）M.Bordt, *Platons Theologie*, Karl Alber Freiburg/Munchen.2006.p98-114

16）Hom, *Od*.1.32-34.

17）Plato, *Rep*.6.505a.

18）P.Murray, *Plato on Poetry*, Cambridge University Press 1997.p147.

19）R.L.Nettleship, *Lectures on the Republic of Plato*.p89.St Martin's Press.1964.p.89

20）J.Adam, op,cit同個所参照

21）C.J.de.Vogelコルネリア・Ｊ・ド・フォーゲル著，藤沢令夫・稲垣良典・加藤信朗他訳,『ギリシア哲学と宗教』，筑摩書房，1969年　p 63.

22）F.Solmsen, *Plato's Theology*, Ithaca, N.Y. 1942.

23）C.J.de.Vogel, op.cit, p63-64.

24）プラトンは『国家』第10巻において、有名な「三段の模倣説」を展開している。プラトンは寝椅子を例にして、3つの異なる寝椅子を想定する。それが寝椅子のイデアと職人が作る現実の寝椅子、そして画家の描いた寝椅子である。画家の描いた寝椅子は真理でありイデアから3番目に離れた存在と規定され、詩人の作品も画家と同様にイデアから3番目といわれるのである。この存在論的区別に従えば、詩人の描く神もあくまでイデアそれ自体ではなく、イデアから3番目に離れたものとならざるを得ないと考えられるのである。

25）Plato, *Rep*.7.522a.

26）Plato, *Rep*.10.605b.

27）Plato, *Rep*.3.383c.

28）Plato, *Rep*.10.607a.

29）プラトン『饗宴』では美そのもの（美のイデア）を愛し求めるものこそ、肉体的欲求に止まらない、人間に本来的に備わったエロースであるということが述べられている。(204B)

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Study on *mousikē* in Plato's *Republic*

Syunsuke SATONAKA

The Greek word '*mousikē*' means all the arts which the Muses preside such as poetry, music, song and dance. In the Books 2 and 3 of *Republic* Plato deals with education by means of *mousikē*. In the Book 2 Plato in particular focuses on poetry and carries out censorship.

It is usually said that the purpose of this censorship is to delete immoral myths composed by Greek poets like Homer and Hesiod. However, it is insufficient only to point out Plato's moral concern, because behind his critical attitude toward poetry and poets there is his own philosophical principle.

The principle: God is good and the cause of only good things, which is introduced by Plato at the argument about poetry in the Book 2 seems to be connected with his own theory of Idea, for Greek poets and philosophers before Plato do not have such a principle about goodness of God. Plato offers an original concept of God that is based on his system of philosophy and demands that poets should compose their works according to it. If a poet represents God as evil against the principle, his work is not useful for education in Plato's ideal state. In *Republic* God as origin of goodness is closely related with Idea of good that Plato regard as most important thing to learn.

In this article I am going to analyze the relationship between poetry and philosophy in *Republic* and clarify the role of *mousikē*, especially poetry, in the system of education for people who will be guardian that rule Plato's ideal state.

キーワード：善，神観，検閲，教育，詩